《書評》

鶴見和子／川田侃　編
『内発的発展論』再読

片倉和人*

書架から取り出した本には，うっすらと埃がかぶっていた。新刊書を手にとるときのような，未知なるものへのときめきはない。すでに見知った本である。書評を書くというだけの動機で本を読むのは，著者に対しても読者に対しても，ちょっと後ろめたい気がする。正直いって，書評を頼まれたとき，なんとなく気が進まなかった。しかし，もう一度読んでもいいかな，という思いが頭をかすめ，結局引き受けることにしたのは，即答できるほど内容について記憶が定かでなかったこともあるし，また私の尊敬する人が共著者のひとりに名を連ねていたのを思い出したからでもある。

この本が刊行されて間もない頃，ある学友が仲間を集めてわざわざ読書会を開いたくらいだから，当時は評判の本だったはずだ。なによりも内発的発展論という題名が，たしか新鮮だったと思う。その会合に私も加わったが，いま振り返ってみると，白熱したわりには議論の内容も本自体も印象が薄い。埃を払って，奥付を見ると1989年３月10日初版とある。

目次の構成は次のようになっている。

＊かたくら　かずと，農村生活総合研究センター

第Ⅰ部　内発的発展論とは何か

西川潤　「内発的発展論の起源と今日的意義」

鶴見和子　「内発的発展論の系譜」

武者小路公秀　「新国際秩序と第三世界知識人 — 世界危機への対応能力としての知的創造性 —」

柳瀬睦男　「非西欧的方法論の試み」

第Ⅱ部　内的発展を探る — その条件と実際的展開 —

室田武・槌田敦「開放定常系と生命系 — 江戸時代の水土思想からみた現代エントロピー論 —」

今井圭子　「ラテンアメリカの歴史的特質と内発的発展」

村井吉敬　「内発的発展論の模索 — 東南アジアの NGO_s・研究者の役割との関連で —」

中村尚司　「地縁技術と地域自立運動 —南アジアからの事例 —」

鶴見和子　「アジアにおける内発的発展の多様な発現形態 — タイ・日本・中国の事例 —」

鳥のように高みから俯瞰できるのなら，たぶん八つか九つの峰が見渡せるのだろう。専門分野も研究の対象地域もちがう著名な学者が，共同研究の成果として世に出した書物である。そうした書物の印象は，富士山のような単峰ではなく，複数の頂をもつ八ヶ岳のような姿に見えるはずだ，と私は勝手に想像した。専門をふまえた上で各論の妥当を論じる資格は，私のような浅学に勿論あるわけがない。ただ低地から山容を仰ぎ見るだけである。でも，大人になって佐久や甲府の地から見た八ヶ岳は，子供の頃から見慣れた諏訪盆地からの姿とは全く別の山に思えた。

いま私が立っている位置からは見えない頂がいくつかあるだろう。手前にある峰は当然，比較的細かなところまで目に入るものだ。中腹の山肌が削られた箇所とか，アラを探そうとすれば目につきやすい。一般に，自分と研究領域が近い人に対しては評価がきびしくなり，逆に馴染みの薄い分野だと甘くなる傾

向がある。だから，たとえば思想史のように，異なる専門分野の人たちが一つのグランドに降りたって互いに競いあう場合，自分の専門につきまとう遠近法的な展望をも考慮にいれて，評価を下さなければならない。そんな忠告を丸山真男が『日本思想大系』の月報に書いていた（月報67，岩波書店，1982年6月）。内発的発展について論じたこの一冊も，ひょっとしたら，全体を鳥瞰できる丸山のような大家にしてはじめて評価が可能な，そうした類いの本かもしれない。目次をながめながら，私は書評を引き受けたことを後悔した。

専門をふまえた書評は無理でも，各論文に共通する，なにか最大公約数のようなものをつかみだして，内発的発展論とはいかなる考え方で，どういう実践につながるのかを，要領よく紹介するぐらいはできるだろう。漠然とそんなふうに考えながら，この論文集を読みはじめた。一冊に収めるにはいささか多彩すぎる内容の本だから，はじめての読者ならば，きっと未知の領域に接したり，自分の参考になる考え方や知識と出くわすだろう。そして，そのことで満足がえられるはずだ。ちょうど私が西川論文のなかでアメリカの19世紀の経済学者ヘンリー＝チャールズ・ケアリという名前とはじめて出会ったときのように。しかし，再読にあたって私が欲したのは，そうした個別の出会いの数々ではなく，鮮明な一つの全体像であった。カメラをずっと遠方に引いてアングルを定めれば，低地からでも山の全景は視野にとらえることができると考えた。

いざ読みはじめるとすぐに，なにかひっかかるものを感じた。そして読み終る頃には，それは苛立ちに転じていた。予想に反して，私の頭の中には，鮮明な全体像が結ばない。各論文の統合点を探ろうとして中心に焦点を合せようとすると，かえってイメージが拡散していく。そんな奇妙な感じに苛まれた。内発的発展論の基本的な考え方は，編者でもある鶴見和子の「内発的発展論の系譜」を読めば概ね理解できる。そこに主峰が位置しているのはわかっていた。だが，主峰と他の峰との位置関係がもうひとつはっきり見えてこない。それに加え，主峰自体も本来もっとずっと高いのではないか，という気がして，もの足りない思いがする。この違和感はいったいどこに由来しているのか。今度はそれが気になりだした。刊行からすでに4年半が過ぎている。いや，まだ4年

半しか経っていない，というべきか。いずれにせよ，この歳月が影響している気がした。

どんな本でも，書かれた時代の刻印を帯びている。厄介なのは，時を経て，その本が置かれていた状況が微妙に様変わりしている場合である。現時点から振り返れば，各論文はそれぞれ単峰のように，個々バラバラな印象を与えている。でも，書かれた当時は，それらを背後で一つに結びつけている共通の脈絡があり，それがいつの間にか隠されて，いまの私には，頂だけが点々と雲間に浮きあがって見えているだけなのかもしれない。4年半前といえば，天安門事件もベルリンの壁の崩壊もソ連の解体もまだである。この間の世界情勢の変化を思い起こすと，時論的な面もあわせもつ本書がどこか色褪せてみえたとしても不思議はない。しかしこの本の基本的な構図は南北問題を扱った理論書のそれに近いから，東西関係の激動の影響をさほど受けていない。要するに，まだ過去の本として読めないし，かといって，時間を超越した本でもない。振り返って書評するには，4年や5年というのはあまりに中途半端な年月である。そのことに遅ればせながら気づき，さらに一時代前の本を一冊，書架から取り出した。

鶴見和子・市井三郎　編『思想の冒険 — 社会と変化の新しいパラダイム —』（筑摩書房，1974年）は，半世代後の『内発的発展論』とは，いわば親子ないし兄弟姉妹のような関係の本である。共著者10人の顔ぶれは，鶴見をのぞけば皆ちがっているが，鶴見の所属する上智大学の国際関係研究所を拠点にして，専門もフィールドも異にする研究者が集まって研究会が組織され，その成果として出版された点は『内発的発展論』とほぼ似通っている。共同研究の形態だけでなく，西欧をモデルとした近代化とは別の発展の道筋を探るという，基本的な姿勢も両書は一貫している。

この『思想の冒険』という一時代前の本を鏡として用いると，『内発的発展論』が置かれている今という時代の特徴が浮び上がってきて，それが私には，ずいぶんおもしろかった。たとえば，『思想の冒険』が対象とする地域は，西欧以外の社会といっても，具体的には中国，ソ連，日本に限られている。その近現

代史の経験のなかに，西欧先進国と異なる発展の論理を探り，しかも手持ちの材料を用いて，普遍的な社会変動のモデルを組み立てようとする。とくに日本の場合は，国家の下位に位置づけられてきた地方やムラといった地域共同体のなかに，国家が主導した近代化の道とは異なる新たな変革の主体や論理が探られている。西欧モデルの近代化に対抗する論理を，手探りでもなんとか築き上げようとする，その強い意気込みが新鮮に感じられた。また，当時は可能性としてでも残っていた土着的なものが，今はすっかり影をひそめているのに思いあたって，過ぎ去った青春を思いおこすような，甘酸っぱい郷愁に捕われもした。

それに対し，『内発的発展論』が分析の対象とする「地域」なる概念は，国家に比べてはっきりと境界線が引けない分，ずいぶん漠然としている。生活の範囲を重視する点で，国家よりも小さな範囲であるが，それは国家の下位体系に限定されず，国境を越える場合もありうるという。事例は，東南アジアや南アジアさらにラテンアメリカといった第三世界に広がり，割合は小さくなっているが中国と日本にも言及される。また環境問題を対象とすれば範囲は当然のごとく地球規模にまで拡大する。それはまた議論の拡散でもある。

手本にしたものとは違った姿になったが，ともかく近代化を成し遂げてしまった日本には，もはや追いすがるべきモデルはないし，かといって，すっかり土から足が離れてしまっているので，伝統にたちかえって，別の道を探ることもむずかしい。だから，第三世界とよばれる地域の人々の生活や文化のなかに，逆に検討に値するものが少なくないと考える人がいても不思議はない。これまで後進的と貶(おとし)められていた生活や文化の側から，日本を含む西欧近代を問い返してみることが，その限界を越えて先に進むための有効な手掛かりになるかもしれない。そんな考え方が著者たちに共通の基盤としてあると思う。そうであるならばこそ，一つ気になったことがある。

『思想の冒険』の中で鶴見は，従来の西欧理論を紹介している。西欧理論によれば，近代化は先発型と後発型の二つに大別され，パーソンズを例にとれば，前者を内発型（endogenous），後者を外発型（exogenous）とよび，リーヴィな

ら，前者を土着発展型（indigenous developer），後者をおくれてきたもの（latecomers）とよんでいるという。いずれも，内発性はもっぱら西欧先進国の側にあり，後発国は先進国をモデルにして外発的な発展の道をたどるものとされる。こうした図式に対する反発が当初から鶴見にはあり，それゆえ西欧理論とはちがう意味で内発性を重視する柳田国男に惹かれもし，他のメンバーとともに「伝統の革新」論を展開していく。『思想の冒険』で「伝統の革新」と言っていた内容は，ほぼそのまま『内発的発展論』に受け継がれているが，後者では，「内発的発展」という言葉を採用し，同時に，内発的発展の主体が後発者の側に置かれ，西欧理論の用語法とは逆になっている。でも，こうした点が気になったわけではない。

鶴見が『思想の冒険』で土着的な社会変動の理論枠組みを準備していたのとほぼ同じ頃，スウェーデンのダグ・ハマーショルド財団は『もう一つの発展』と題した報告書を国連特別総会へ提出し，そのなかで，「内発的発展」（Endogenous development）という言葉と使っていたという。西川によれば，「もう一つの発展」の内容は，①基本的必要に関連している（Need-oriented），②内発的である（Endogenous），③自立的である（Self-reliant），④エコロジー的に健全であること（Ecologically sound），⑤経済社会構造の変化が必要であること（Based on structural transformation），この５点であり，さらに鶴見は「もう一つの発展」という言葉は「内発的発展」と同義語として使うことができるという。

内発的発展論というのは，私なりの理解で平たく言えば，援助という形で開発に係わっている側が，自分の手持ちのモデルを一方的に相手に押しつけるのではなく，相手の生活や文化や理論を尊重しましょうという考え方である。言うなれば，それは，なにか器のような概念であって，その器に盛られる中身についてはことさら厳密にふれられていないように思われる。だから，内発的発展論の系譜をたどるということは，器がどのようにしてできてきたかを語ることであり，本書でとりあげられている内発的発展の具体的な事例というのは，どうやら，その器に盛るにふさわしい素材を各自で勝手に探し集めて並べてみ

せたもののことのようである。

素材をひろく探し求めること自体は悪いことではない。たとえば，西川論文では，内生思考の起源が西欧近代思想史のなかに遡って探られる一方で，「地域おこし」のような日本の地域社会がかかえる今日的な課題にもふれられている。室田・槌田論文では，エントロピー論によって地球環境や生命体にとって循環がいかに大切かを再認識させてくれると同時に，江戸時代の思想家，熊沢蕃山の思想のなかに現代エントロピー論との類似性が探られている。だが私には，自在な思考や博識に感心するよりもむしろ，あまりに大きな飛躍があるように思えて，違和感の方が強く感じられた。内発的なものというのは，時間や空間の大きな隔たりを一跨ぎに飛び越えるような自由自在な知的行為と，どこかそぐわない気がするからである。

地域の人々の暮らしのなかから，じわっと滲み出てくるようなものをすくいあげ，それを外部の者にもわかるように理論化すること。そうした知的な営みによってはじめて内的必然性とよべるものが解き明かされるのだと思う。なぜそうする必要があるのかを具体的な裏づけをもって説明できる理論や実践でなければ，外部からの一般モデルに対抗することはむずかしいし，説得力も生れない。具体的な「地域」がいくつかとりあげられ，その地域に固有な必然性が明らかにされ，地域独自の発展の道筋が，既存の開発論を跳ね返すほどの説得力をもって記されている。そんな内容を私はこの本に期待したが，期待した記述が意外と少なかったのが私の不満であったのだと，ここまで書いてようやく胸におちた。本書を前にして私の目に写った姿は忠実に描いたつもりだが，視野の狭さはいかんともしがたいし，遠近法的な展望を考慮して修正を加える力も余裕もなかった。

(1989年，東京大学出版会，2,987円)